＜書評＞

笹沼俊暁『リービ英雄〈鄙〉の言葉としての日本語』

橋本恭子

著者にとって、本書は二冊目の単著である。前作の『〈国文学〉の思想—その繁栄と終焉—』(学術出版会、2006年2月)では、明治期以来、イデオロギー的側面から近代国民国家の統合を支えてきた「国文学」が、目標の達成とともにその役割を終えたことを宣言する一方、「あとがき」で、役割を終えたのは、あくまで「国民国家の構築と社会の近代化」を前提とした「国文学」であり、決して学問そのものではなく、むしろ「国文学」には「現状に対しての批判的な意志をしめしつづける責任」があると新たな役割を課して、締めくくりとしたのであった。

それから六年近くの歳月を経て登場した本書は、「批評性」に「文学」再生の可能性を託した先の「あとがき」の地点から出発し、リービ英雄という稀有の日本語文学の書き手を対象に、彼の創作の営為をとおして「批評」として文学のあり方を具体的に探った論考である。大枠において前作の論理を踏襲してはいるものの、実は両者の間には大きな違いがある。それは、前作が「国文学」の内部にのみ留まった論考であったのに対し、本書には「国文学」の境界を越えた外部からの視点が含まれている点である。それには著者の身の上に実際に起きた変化が大きく関わっている。多分に自嘲的な本人の言葉によれば、著者は博士号を取得して日本の大学院を卒業したものの、就職口が見つからず、「博士難民」として台湾へ「亡命」を余儀なくされ、台湾地方都市の私立大学で日本語を教えることになったのである。さらに、本書には記されていないが、日本語教師としては必ずしも必要のない中国語を身につけ、日本文学に関する論文を中国語で執筆したり、口頭で発表するまでになった異言語体験も大きく作用しているだろう。

現在、著者が教鞭を取る大学の所在地、台中で幼少年期を過ごしたリービ英雄を考察の対象に選んだのも、その結果であり、もし著者が日本に留まり、日本語だけの世界に充足していたならば、おそらく本書は生まれなかったはずである。それゆえ本書は、日本語教師として異国で日々直面する問題と、日本から携えてきた従来の課題とを接合させ、外部から改めて「日本語文学」の意味を考察した、若き国文学者の貴重な成長の記録とも読めるのである。体裁としても、学

術論文ではなく、リービ英雄に向き合うことから生まれた思考を直接表現するという、極めて私的なスタイルになっており、リービ英雄の作品が「私小説」であるなら、本書はさしずめ「私評論」といえるのではないだろうか。もっとも、「私」から出発し、「私」と研究対象の間を往還する姿勢は、『〈国文学〉の思想』の時から明らかであった。同書では芳賀矢一や岡崎義恵をはじめとする国文学界の泰斗を批判的に論じながら、著者は批判の矢を自らにも向け、「国文学」のあり方を模索していたのである。

批判を他人事で終わらせない厳しさは著者に一貫した姿勢であり、それが著者の仕事を信頼に足るものにしているのだが、この他者を語り、自らを語るという試みは、本書において更に一歩進められることになった。本書全体に響きあっているのは、日本語を教える立場にある著者と、日本語を学び、日本語で創作する立場にあるリービ英雄の表裏一体となった問題意識である。まず、出発点にあるのは、著者が大学の日本語教育の現場で日々感じる疑問だが、その最たるものは、日本語が往々にして「日本人」や「日本民族」、「日本人の心」といった人種的イデオロギーと容易に結びついてしまうという点であった。実は、リービ英雄もその点に一貫して批判を呈してきたのである。一方で、そうした桎梏から日本語を解放しようとすると、今度はグローバル化や新植民地主義といった拡張主義に簡単に陥ってしまう。著者はそうしたジレンマを乗り越える方法を、リービ英雄との対話をとおして、探っていくのであるが、それは日本語による創作を人種主義やナショナリズムから切り離すと同時に、グローバリズムや新植民地主義にも還元されない「個」の「声」として確立しようとする試みであった。著者は、そのためには「批評性と倫理性」が必要であると説くのだが、それが本書全体を貫くキーワードとなり、リービ英雄の「批評性」とはなにか、「倫理性」とはなにか、が各章ごとに検証されることになる。以下で、順を追ってみていこう。

まず、第一章の「ふるさととしての『島』」では、1950 年代後半から 60 年代初めにかけて、リービ英雄が五歳から十一歳までを過ごした台湾の地方都市台中の家が、後の日本語による創作の根源として、重要な機能を果たしていることが言われる。そこは現実の台中ではなく、英語・日本語・北京語・閩南語など、複数の言語が交錯する場所であり、リービ英雄にとっての「文学のふるさと」であった。著者は、そこでの経験が後に彼をマイノリティーの立場に向わせる契機となった、と見ている。

第二章の「『文学者』としてのリービ英雄」では、リービ英雄の日本語による創作が、人種論と結びついた日本近代文学への批判となっている点が論じられる。リービ英雄が登場した 1990 年代は、ちょうど日本の文学界で日本語を母語としないマイノリティーによる日本語文学が話題になった時期であり、彼らにとって、日本語は「民族の精神」と地続きの自然ではなく、外在物としてあったという。リービ英雄の日本語による創作活動も日本語の外在性と構築性を示すことに向けられたが、ただそれだけで、ナショナリズムや植民地主義への反駁になりうるというわけではない。著者によると、そのための戦略として、リービ英雄はあえて「私小説」の形式を採用し、作られた「私」を仮面として身につけることにより、近代の産物である「主体」の脱構築だけでなく、民族や国籍の脱構築を可能にしたのであった。

第三章「研究と創作の主体」では、優秀な日本文学研究者であったリービ英雄が、日本語による創作に踏み切った意義を探る。著者はそこに、強者が弱者を観察・記録する行為としての側面を有していた、ドナルド・キーンやサイデンステッカーらによるアメリカの日本文学研究に対するリービ英雄の特異な批評性と倫理性を見出している。彼の創作活動は、いってみれば、観察者の立場を捨て、観察の対象となる客体に全面的に介入することを意味するが、そうした活動自体がアメリカ側からの日本学というオリエンタリズムに対する批評になっているという。同時に、それと共犯関係にある日本側のナショナリズムとそれが生み出す表象を脱構築することにもなった。その点は、リービ英雄が日本語によって「日本」という表象を描き出すことを拒否していることからも明らかであるが、彼にとっての日本語は、表象の対象として「日本」を描く手段ではなく、それを用いて普遍的、あるいは私的な問題について考え、表現するための手段だったのである。

だからこそ、リービ英雄は「私小説」という日本近代文学の典型的な形式を用いながら、もっぱら中国大陸を描くのである。そのことが含む批評性については、第四章「中心と周縁」で詳細に論じられるが、リービ英雄は中国を描きながら、東アジアの前近代的な華夷秩序を想起し、日本語を漢字文化圏における「周縁」の言葉、つまり「鄙」の言葉と捉えなおしたのであった。それによって、植民地帝国の文学としての日本近代文学の復活を牽制し、オリエンタリズムや拡張主義的なものへの批判とするのである。ただし、リービ英雄の中国への関心は、東アジアの中心としての立場にあるのではなく、経済発展やグローバル化から取り残された「周縁」に向

けられていた。それは、中上健次の「路地」を継承する行為でもあったが、リービ英雄が自らの周りに存在する「周縁」の問題に目を向けず、日本に見切りをつけて中国に向った点に対して、著者は批判的である。

第五章「複数の声たち」では、リービ英雄が「声」を通して見出した、中国の多様性が論じられる。台湾という多言語的な空間に根を持つリービ英雄は、中国を訪れても「周縁」で話される多様な言語に耳をすまし、それをあえて「和文脈」と呼んだ。それは、中心の声＝「漢文脈」に対抗しうる多様性の概念として捉えられている。著者によれば、リービ英雄は、中国大陸の多様性を過分に評価する嫌いもあるが、そこに近代国民国家の領域性、排他性を超える可能性を見出そうとする彼の営為には、やはり重要な批評性が備わっているという。

第六章「ポストモダン時代の日本文学」では、日本近代文学の終わりが宣告される現在にあって、リービ英雄があえて日本語で小説を書く意味を考察している。9·11 同時多発テロに遭遇したリービ英雄は、芭蕉の句を基調とし、明確なストーリーのない「千々にくだけて」を書いた。著者によれば、これは、俳句のような小さな声の断片をちりばめることにより、テロの後に世に満ちあふれた原理主義やマジョリティーの言葉、あるいはハリウッド映画のように単純に再物語化された現実政治に対する批評になっているという。

こうしたリービ英雄の日本語による創作に、著者は近代国民国家の中心的なメディアとしての「文学」が終焉した後に再生すべき、「批評性」を使命とした「文学」のあり方を見出し、さらに結論として、そこから「日本語」や「日本語文学」の可能性を引き出す。それは、国民国家や植民地帝国の政治的言語、あるいはグローバル化時代の商業用語としてではなく、マイノリティーの言語、つまり「鄙の言葉」としての立場から、強者や原理主義の言語を批判する普遍的な批評性の役割をになうことである、という。

以上が全六章の概要であるが、全体をとおして、リービ英雄の作品に丁寧に向き合いながら、その「批評性」を周到に引き出し、日本語文学のあるべき方向性を説いた先鋭な評論になっている。同時にこれは、台湾の日本語教師として、日本語教育のあるべき姿を明確に示した貴重な論考でもある。著者が、「独特の歴史性を背負った日本語を学び、それを活用することを通じてこそ初めて可能になる、台湾内部や他のアジア諸地域をはじめとした世界の諸問題、また日本の中のマイノリティーの問題等についての独自の視点や交流や社会運動もありうるはずである。また、そこで日本語が脱構築され、独

自の表現の可能性が生まれることもあるだろう。リービ英雄の日本語での創作活動は、文学の領域からのそうした試みの先駆的な一例として評価すべきであるように思われる」(135-136頁)というとき、その言葉は日本語を学ぶ学生たちに直接向けられていることは確かである。

本書が文芸評論というだけでなく、日本語教育論としても、優れた論考になっていることは間違いないが、疑問に思った点を二点ほど挙げておきたい。

まず、リービ英雄の「批評性」だが、日本語圏の読者にはそれが読み取れても、英語圏の読者にはどれほど批評たりうるのか、という懸念が残った。そもそも彼の日本語作品は英語に翻訳されているのか(あるいは、本人が英語で書き直しているのか)、英語ではどのような創作活動をし、英語圏ではどのように評価されているのか、という点も気になる。それは、リービ英雄の「批評」が誰にとっての「批評」なのかという問題にもつながるのであるが、彼の作品が日本語の世界にだけ留まっているなら、彼の批評もまたその内部でしか機能しないと思うからである。

例えば、著者は「リービ英雄は 9.11 テロの後に世に満ちあふれた原理主義の言葉に対して、日本語の文学によって反省をうながすことになったのである」というが、いったい誰に対して、どのような反省をうながすことになったのだろう。彼の「批評性」がグローバリズムに対抗していけるだけの力を持つには、残念ながら日本語のままでは不十分であり、やはり英訳されて、英語圏の内部からの批評となる必要があるのではないだろうか。日本語の創作を通して獲得した視点によって、英語圏の内と外とを往還しながらグローバリズムを批判するというところまでいって、初めて批評たりうると思うのだが、そのあたりの考察も必要かと思われる。

また、著者によると、マイノリティーの言葉、つまり「鄙」の言葉としての日本語はもともと「『中心』の言葉を崩したり批評したりしてきた歴史を部厚く背負って」おり、だからこそ、今後も「強者や原理主義の言語を批評する普遍的な批評性の役割」をになうべきだというのであるが、参照として金文京『漢文と東アジア—訓読と文化圏』を挙げてはいるものの、「鄙」の言葉が中心の言葉に与えてきた「批評性」の役割が、十分説明されているとは言いがたい。そもそも近代以前の日本文学の歴史において、「鄙」の言葉としての日本語が、どれほど中国語という中心の言葉を「崩したり批評してきた」のだろうか。また、将来においても、中国語や英語に対して、どれほど批評性の役割を演じられるのだろうか。本書からは具体的なイメージが伝

わらず、若干理念が先行しているように感じられる。これは、上記の英語圏におけるリービ英雄に対する評価や翻訳の問題とも関連してくると思われるが、この点についてはむしろ、比較文学者が著者からバトンを受け継いで、考察を進めるべきかもしれない。

さらにいくつか議論すべき点はあるが、本書が刺激に富む啓発的な論考であることは確かであり、日本語や日本文学だけでなく、外国語や外国文学を学ぶ人、あるいは教える立場にいる人にはぜひ読んでほしい一冊である。

(Kyoko Hashimoto
日本社会事業大学兼任講師)